

は見えないので。

○質問者 いずれにしても、1号を優先して冷やせという、残りの部分はですね。実際、そういう方向で取りかかろうということになっていたんですね。

○回答者 はい。

○質問者 これは爆発の相当前になっているんですけども、当時の状況としては、消防車が来て、物揚場から消防車を引っ張って直列に並べて、逆洗弁ピットの中で水を補給していくと。逆洗弁ピットの中から、1号と2号と3号に1台ないし8台という消防車を使って、それぞれに入れていくというラインをつけて、3号機爆発時にも入っていたのは1号のみで、ほかはまだ待機状態という状況だったわけですね。

○回答者 はい。

○質問者 8号機が爆発する前、ちょうどこのころとか、これよりちょっと前の10時台、要するに、退避命令が解除された後の作業中などは、9時20分に物揚場から補給するラインができ上がって、この時点で、例えば、素人考えで行くと、これで水がじゃぶじゃぶと逆洗弁ピットの中に海水が入っていくわけだから、2号はまだちょっとあれとしても、1号と3号は両方とも入れてしまえばいいのになとも思うんですけども、この水量では賄えない。

○回答者 このとき、避難のタイミングはいつでしたか。

○質問者 避難が、恐らく3月14日の8時40分とか、そのころに退避命令を出しています。

○回答者 出しますね。解除はいつしたんですか。

○質問者 その解除がはっきりしない。これを見ると、どこかでもう行けという話になって。

○回答者 さっきのところで、行かせますよと言っていましたね。とりあえず水の補給だけは行かせますよという形で、水の補給でこのラインナップを完成したんだと思うんですけども、記憶が本当にここは途切れてしまっていて、その次の爆発の話があるまでですね。

○質問者 この辺は、1号、2号、3号とあって、2号はまだ、一応、この時点では。

○回答者 2号はまだですね。

○質問者 だから、1号も水を入れなければいけないというのはわかっていますね。

○回答者 わかっています。わかっているんですが、そのとき、結局、ピットの水が少なくなったんで、メーギャップしに行った。とりあえず8号機がかなり中断していた時間が長いんで、3号機に水を入れ続けられないといけない。1号機は若干まだ余裕があるというのは、さっきの話ではないですけども、今までの注水量がかなりの量入れていますから、そういう意味で余裕があるだろうという判断をしていたとは思いますが。

○質問者 そうすると、その判断の根拠からすれば、1号も時間が、2時間、3時間、4時間、5時間、6時間たっていけば、また再開しなければならないという頭にはなるんで

すね。

○回答者 それは勿論あります。

○質問者 だから、この官邸の決定指示事項ということがあるとないと問わず、いずれまた、2号がまだこういう状況であれば、3号をやって、ある時期からは1号も入れるということは当然頭にあったわけですね。

○回答者 あったと思います。

○質問者 次が、爆発の後、夕方のころですね。

○回答者 42番ですか。

○質問者 42番ですね。今度は、8月14日、爆発して、今度、2号機の方もROIC止まって、このころはベントをして、2号機のサブチェンの水温だとか圧力が非常に高いということから、ベントラインをきちんとつくって減圧操作をしましょうというような状況になっているところで、今からやるところの前のところに、所長のお言葉で、「済みません、吉田です。サイトの皆さん、聞いてください。もう一度、ちょっと頭を整理します。一応、今、計装の方で、2号機の減圧注水に向けて最後のベントラインを生かすという操作をやってもらっているところで、現時点の目標で言えば、TAFが17時30分という最新の予想が出てきましたので、17時、5時をもってSR弁を操作して減圧し、注水をするという操作に入っていく、ということを決定しました」と。だから、今、この時点では、ベントラインを生かすという操作を減圧注水に向けてやっているという時期で、何とか、TAFが17時30分なので、その30分前である17時にはSR弁を操作して減圧して、水を入れていこうと、ゼロを切るのを防いで、水をどんどん入れていきたいと思いますというような決定のような形を出して、それで動きますというふうにしていた後のところからなんで、それをちょっとごらんいただけますか。

(録画部分)

「本店の高橋明男さんが1Fの吉田所長と話をしたいと言っていますので(・・・)」

「吉田さん、今、電話に出ています」

「今、官邸から、(・・・)か何かで、2号を起動しろ、注入を開始しろというのは行っているはずなんですよ。それを言おうと思ったんで、武黒さんを通じて、今、その話が行っているんじゃないかと思います」

「はい、わかりました」

「高橋さん、今、所長はその電話中です」

「済みません、本店に確認したんですけれども、先ほど2Fで消防車を受け取って1Fへ持っていけと言われたんですが、来たのは消防士4人であって、消防車が来ていません。このまま行っていいいんでしょうね」

「そのまま行ってください。消防自動車を打つんです。申し訳ありません」

「消防士を連れていけばいいんですね」

「そのとおりです。エステイマに乗ってきた消防士を連れて行ってください」

「わかりました。（・・・）連れていきます」

「ありがとうございます」

「増田所長」

「はい、増田です」

「皆さん、聞いて。本店の方も聞いてください。今、安全委員長の斑目先生から電話がありまして、格納容器のベントラインを生かすよりも注水を先にすべきではないかと。要するに、減圧すると水は入っていくんだから、そこは待たないで、一刻も早く水を入れるべきだというサジェスションが安全委員長から来たんですが、そのサジェスションに対して、安全班、それでいいかしら、こういう中で」

「サプレッションチェンバの水温が180度を超えてきて、蒸気がサプレッションチェンバに落ちてでも恐らく凝縮しないということは減圧が見込めない。そうなると、（・・・）水がそれだけ（・・・）出てきて、多分、減圧できないということを恐れているというのが実態です」

「サプレッションチェンバは水温がもう100度を超えているんですよ」

「その話は斑目先生（・・・）」

「済みません。本店、          です。吉田所長」

「官邸から、水が入らない可能性が高いと（・・・）」

「吉田所長。          さん」

「はい」

「本店、          です。188度の経緯はわかっています。蒸気は200何千度ありますね。それが188度になると一旦水が落ちるんですよ。凝縮すれば確かに落ちますけれども、その結果として炉内圧力、若干上がると思います。だけれども、凝縮すれば、失われているということではないと思います」

「では、いいですか、これで」

「今の          君の話は上げる？」

「ベントを開ける前にやっちゃってもいいということ。もう冷却した方がいいという話ですね」

「いや、冷却ではなくて、ベントをすることは問題ないと思われているということです」

「今、違うんでしょう、冷やすの」

「違うんです。今の方では、ベントラインできる前に減圧して水を突っ込むべきだということを斑目先生がおっしゃっている」

「その場合の（・・・）は、サプレッションチェンバの水位がそのまま上昇を続けて、現在、水位不明だと思いますけれども、ウェットウェルベントラインが埋まるということの懸念があると思っています。現在も埋まっている可能性はあると思いますが、早目にベントしないと、ウェットウェルラインが生かせなくなるというところを懸念します」

「現場から言うと、斑目先生のおっしゃるとおりだと思っていいんですか」

「違う。違うんでしょう」

「サブチェンからのペントをトライすべきではないかということです」

「だから、サブチェンからのペントを今、ドライしているんです」

「ですから、炉注を継続するという事よりも、炉注は減圧してやるということを前提にペントをすべきではないかということです」

「ちょっと現場はわからないんだけど、斑目先生と所長、何が違うんだっけ。我々は、ペントは今しているわけよ」

「そういうことですね」

「それを冷やしてから減圧して注入しようとしているんだけど、斑目先生は、サブチェンからの減圧はペントラインを生かす必要はなく、まず突っ込みなさいとおっしゃっているんですよ」

「そこは、あつたんだと思うんですが、結局、最後に炉心損傷してしまった後のことを考えると、ドライウェルペントしかなくなるということに対する懸念で、先にまずサブチェンからのペントをやった方がいいんじゃないかと思うわけです」

「思うのはいいんだけど、今はもう時間がなくて」

「あつ、済みません」

「安全委員会委員長並びに保安院長並びに官邸の方から、もうすぐ操作やりなさいとおっしゃっているから、それでいいんですかと聞いているんです」

「今、要するに、残りとしては、100ミリ＋（・・・）1,000ミリで1,100ミリだと言ったら、一応、御納得はいただけたというふうに考えております」

「そういうこと。はい」

「だから、我々のやり方で認めていただいたということね」

「そういうふうに認識しております」

「それで、吉田君さ、さっきから言うと、大体、もうペント弁開いてなければいけない時間なんじゃないの」

「そうです。だから、そこを確認した。5時なんだけれども、早くペント弁を開ければ（・・・）そこはどうなの」

「今、接続作業を行っています」

「えっ」

「まだです。待ってください」

「だから、ちょっと待ってくださいではわからないんだよ」

「できれば、可及的速やかに、5時を待たずにやるということも視野に入れてやるということでもいいですか」

「それでやってください」

「はい。わかりました」

「福島第一の保安グループからお願いします。1Fで手伝ってもらった柏崎のメンバーが今、2Fのビジター室の前にいます。ビジターハウスの前で、1Fから来た人は、呼ばれているのに入れられないということで」

○回答者 これもどうでもいい。

○質問者 ちょっと止めてくれますか。その次のページ、本店の清水社長が出てくるんで、その辺りから。

(録画部分)

「(・・・)できないんで。ただし、5時なんだけれども、5時で取るんですが、ベントラインが動作できれば、可及的速やかに、5時を待たずにやるということも視野に入れてやるということでいいですか」

「それでやってください」

「はい。わかりました」

「許可をもらいたいんですが」

「お願いします」

「済みません。今のラブチャーベントラインの(・・・)説明します」

「今、電源を投入したんですが、動きが感じられないということで、空気側はコンプレッサー動いておりますが、空気側の圧力が平坦でない可能性があるんで、今、確認をしなければいけないという状況です」

「これはどれぐらいのスピードで」

「これは圧が見えないので、動くまで待つしかないんで」

「吉田さん、清水です。斑目先生の方針で行ってください」

「はい。わかりました」

「それでやってください」

「      さん、      さん、今、話聞いていた？ラブチャーベントラインは時間がかかる  
と、これはこれでやってくれ。(・・・)絶対重要だから、それはそれでやってください。  
ただし、これを待っていると、ますます燃料が危険な状態になってくる可能性があるから、  
操作の方に行くということでもいいですか」

「イエス。それでやってください」

「はい。本店の社長指示出ましたけれども、技術的に、武藤本部長、大丈夫ですか」

「大丈夫だよ」

「いいですか。もう一遍整理します」

○回答者 これは私ではないです。1Fではないです。タカハシです。1Fはだれも入っていない。高橋フェローです。本店です。

ここは、社長から言われたのは、何度も武藤本部長、大丈夫ですかと聞いているのは、社長を信用していないですから。技術屋ではないですから。だから、本部長、大丈夫ですかということを、技術的な念を押しているということなんです。武藤からの返事がなかったものですから。あのときはオフサイトセンターの中にいたんだよね。いなかったのか。どこに行っていたんですか。

○ 福島県の県内にはいた。

○ 回答者 勿論。このときには、ここからどこかへ移動しているわけではないと思うんです。オフサイトセンターの中のどこか、別のところにいたかもしれない。

(録画部分)

「斑目先生のやつでいいんですね」

「では、いいですか。別枠のベントラインの復旧工事は並行してやってください。その上で、皆さん、4時30分から減圧操作を開始するというので、準備できますか。大丈夫。だめだったらだめと言ってくれればいい。操作側から言うと、16時30分に操作を開始ということで、準備に来てください。(・・・)決めてください」

「(・・・)最終的に本部長にもらいますけれども、順番だけ確認したいと思います。一番右側のボードに書いてありますけれども、最初に海水から逆洗弁ピットへの運転していることを確認。これはもう運転していると思います。次が、逆洗弁ピットから2号の炉心に注入するラインができ上がったところで、④のSR弁の開操作に入る。プラスマイナスゼロで密度補正すると」

「斑目先生、そんな余裕ないんじゃないかと言っているんですよ。(・・・)がないから入れない」

「もう(・・・)やってしまおう」

「(・・・)をして、減圧操作を行います」

「何分、減圧操作（・・・）」

「ごめん、吉田さん。ペントやっている人は危険はないですか、その場所は」

「ペントのラインをやっている人は危険はないです」

「ない。はい」

「逆洗弁ピットへ」

「ないからいいんだよ。ややこしいこと言うな」

「では、指揮者はでかい声で発声してやってください。16時28分、減圧操作の指示を行いました」

「減圧操作、第一、16時28分。これはあれかな、関係箇所に連絡かな。よろしくお願いします」

「済みません、通報の方、よろしくお願いします」

「通報は既に実施しております」

○質問者 今、ずっと斑目原子力安全委員長からの連絡があつて、それから、しばらく電話のやりとりなんかがあつて、この流れを見ると、まず、電話があつたのは、42番のところからですけども、本店の高橋明男さんというのは、フェローですか。

○回答者 フェローです。

○質問者 高橋フェローが吉田所長とお話がしたいというふうに言っているときに、ちょうどその電話に出ておられたとき、これがもう既に斑目さんとお話をされていたんですか。

○回答者 はい。

○質問者 最初、電話のときというのは、いきなり斑目さんが電話をしてくるんですか。

○回答者 このときは何かびっくりして、いきなり電話に出た、斑目も、名乗らないんですよ、あのオヤジはですね。声から、何かばーつと言っているわけですよ、喚き散らしてですね。

○質問者 斑目さんがですか。

○回答者 斑目が。

○質問者 あの人、そういう人なんですか。

○回答者 もうパニックっている。これ、こうで、こういうわけだと言っているわけです。何だ、このおっさんとは思って、聞いていると、どうも斑目先生らしいなと思って、はいはいという話をしている、何ですかという話をして、そうしたら、今はもう余裕がないから、早く水を突っ込め、突っ込めと言っているわけですよ。今、ペント操作しているんですけどもという話をしたら、ペントなどをやっている余裕はないから、早く突っ込めと言っているんですよ。そこからこっちにやりとり（・・・）斑目先生とか、保安院長が隣にいたんです、多分ね。

○質問者 そのときは、保安院長とか、ほかの人が代われ代われとかと。

○質問者 斑目先生がだーつとしゃべる前に、結局、メインは斑目先生と話をしたんです

が、最初、斑目さんが出てきたのではなくて、だれかが出てきたんです。それは保安院長だったか、私は忘れてしまったんですけども、保安院か、どこかの人が出てきていて、そこを話していたら、途中から斑目さんが名乗りもしないで、こうしろということをおっしゃって、だれだ、このおっさんはというところへつながってくるんですけどもね。どうもこの声を聞いていると、度を失った原子力安全委員長だなど、何となく声のトーンからわかったということです。

○質問者 そうすると、電話の向こうにいた面々は、2号機が非常に危うい状況だということとは認識されておったんですね。

○回答者 と思います。

○質問者 それで、早く水を入れないと危ないというところで、そういう。

○回答者 ずっと前から、要するに、1号、3号、優先しているという話をして、水がピットにないから、3号、1号だよと言っているときから、官邸が2号早くやれ、2号早くやれと言っていたわけですから、それで多分、メンバーがいて、その連中がデータを見て、危ないと。うるさいって言ってるんだよ、こっちはやりたいんだ、当たり前だと。だけれども、条件が整っていないでしょうと。ベントの話もあるし、さっき言いました凝縮するにしても、100度を超えているサブプレッションチェンバで本当に凝縮するのかとか、炉圧が下がるのか、格納容器圧力が下がるだろうから、勿論、炉圧が上がるだとか、炉圧が下がるだとかいうことも、初めての経験ですから、よくわからないという中でやっているわけですね。

○質問者 これ、流れからすると、斑目さんは今すぐにでも水を入れろということで行きますね。本店の[ ]さんが言っていたことは、結局、現場の方でやっていたこと。

○回答者 そうです。早くベント、おまえが言っていることはわかっている、こうなってしまうんです。何を言っているんだと、違うことを言っているんだろうと、それは大丈夫かどうか聞いているんだということで、この辺は完全に頭に血が上っているんですね。

○質問者 結局、そういうので、当初はそれで、この流れとしては、斑目先生、そうは言うものの、本店と現場としては、まずベントラインをつくるのが先決だよねということで、一旦そういうことでやろうという感じになっていたんですね。

○回答者 そのまま継続しようとしたんだけど、ただ、ベントがね、ここもまた[ ]が登場してくるわけですけども、どうなっているんだと言ったら、なかなかできませんという、できない話が入ってくるんで、だったら今まで言っていたシナリオ全部狂ってしまっているかと、では減圧するしかないのかという話をしているときに、清水社長が、技術的内容を理解しているかどうか知りませんが、やりなさいということをおっしゃるわけですね。

○質問者 清水社長は、現場にこれをやれとかいうふうに、今回の一連の中では。

○回答者 初めておっしゃったのではないですか、このとき。

○質問者 それで、斑目先生の方式で行ってくださいということだったんですね。それで、

結局、それに着手をして、16時30分前後ぐらいから減圧操作を開始すると。実際、減圧操作、その後、かなり手間取ってしまったんですね。

○回答者 パルプが開かないと。(・・・)が開かない。

○質問者 例えば、その前の経験だと、3号機などは9時8分から9時20分ぐらいの間に減圧していてということであつたけれども、結局、時系列を見ますと、18時ぐらいの段階ではまだ5.4MPaで、19時08分に0.68MPaまで一気に下がっていると。4時半からだと、7時ぐらいまでは2時間半ぐらいの間、ずっと四苦八苦して、減圧操作されていたということになるわけですね。その間は、横から電話とかなかったんですか。おまえら何をやっているんだみたいな。

○回答者 それはなかったです。あつたというか、ちょこちょこです。ビデオは映っていないですかね、その後は。

○質問者 いや、映っているんじゃないですかね。

○回答者 私も記憶ないんですけども、私は何せ焦っていたんで、早く減圧させると。S3が開かない、開かないと言っても、私自身、パニックになっていました。

○質問者 議事録の中で、見ていると、SR弁がどういう状況にあるのかというので、例えば、最初に起こる、ちょっと失敗したとか、いろいろ書いてあつて、パワーが足りないとかですね。

○回答者 バッテリーのですね。

○質問者 ということが、ちょこちょこ出ているんですね。

○回答者 新たなバッテリーを持っていけとか、たしか、そんなことをやっていたと思うんですけども、バッテリー予備ないのかとか、それは私のイメージだと、現場で早く上げろ、早く上げろと横にせつついて、当直長に電話しているわけです。このとき、またややこしいのは、当直で上げるのか、保修で上げるのか、下らないことを言っているわけです。ばかやろう、何やっているんだと言って、上げろと言ったら上げるんだと、そういうことを言っていたような記憶があります。役割分担なんて話ではないだろうと。

○質問者 当直と復旧班が一緒に行っているようなものもあるんですけども、あれは結局。

○回答者 あります。運転員はものが正常になる状態では操作というのはできますけれども、バッテリーをつなげろとか、その辺は復旧班で、計装屋がフォローしないとできないんで、一緒にやっていくんです。操作どっちがやるんだとか、下らないことを言っていたので、激怒していたと思うんです。

○質問者 この後ぐらいに、要するに、SR弁がなかなか開かないというところから、夜に行くぐらいのころ、本店も含めてなのかどうかはともかく、実際の退避は2Fの方に行っていますけれども、退避なども検討しなければいけないのではないかみたいな話というのは出ていた。

○回答者 出ていますというか、これは、余りに大きい話になりますし、そこでうちの本

店から言ってきたわけではなくて、円卓で言いますと、円卓がありますけれども、廊下にも協力企業だとかがいて、完全に燃料露出しているにもかかわらず、減圧もできない、水も入らないという状態が来ましたので、私は本当にここだけは一番思い出したいところです。ここで何回目かに死んだと、ここで本当に死んだと思ったんです。

これで2号機はそのまま水が入らないでメルトして、完全に格納容器の圧力をぶち破って燃料が全部出ていってしまう。そうすると、その分の放射能が全部外にまき散らされる最悪の事故ですから、チェルノブイリ級ではなくて、チャイナシンドロームではないですけども、ああいう状況になってしまう。そうすると、1号、3号の注水も停止しないといけない。これも遅かれ早かれこんな状態になる。

そうなると、結局、ここから退避しないといけない。たくさん被害者が出てしまう。勿論、放射能は、今の状態より、現段階よりも広範囲、高濃度で、まき散らす部分もありますけれども、まず、ここにいる人間が、ここというのは免震重要棟の近くにいる人間の命に関わると思っていましたから、それについて、免震重要棟のあそこで言っていると、みんなに恐怖感与えますから、電話で武藤に言ったのかな。1つは、こんな状態で、非常に危ないと。操作する人間だとか、復旧の人間は必要ミニマムで置いておくけれども、それらについては退避を考えた方がいいんじゃないかという話はした記憶があります。

その状況については、細野さんに、退避するのかどうかは別にして、要するに、2号機については危機的状態だと。これで水が入らないと大変なことになってしまうという話はして、その場合は、現場の人間はミニマムにして退避ということをやったと思います。それは電話で言いました。ここで言うと、たくさん聞いている人間がいますから、恐怖を呼びますから、わきに出て、電話でそんなことをやった記憶があります。ここは私が一番思い出したいところです、はっきり言って。

○質問者 武藤さんと細野さんは一緒にいるわけではないから。

○回答者 全然別です。ですから、本店です。武藤だったか、だれだったか、私も忘れたんですけども、そんな話ができるのは武藤ぐらいしかいないと思って、あのときですね。

○質問者 それに対して、お二方、武藤さんなり、本店側の人間に対して電話したときの向こうの反応はどうでした。

○質問者 別にどうということではなくて、そういう状況かということなんです。それでOKだとか、そうではないとかいう話ではないんですけども、私は、そういう危険があるよと、わかったと、そういう感じなんです。私の行動としては、廊下にいた協力企業の方のところにいきまして、みんな、よくわからないでばっつと見るなりしていますから、この人たちを巻き込むわけにいかないと思って、一生懸命やってきましたけれども、非常に大変な状況になってきて、皆さん、帰ってくださいと。退避とは言わないです、帰ってくださいと。(・・・) 帰っていただければというお話をして、あとはこっちに持ってきて、こっちも声なかったですよ、その時点。あとは待つだけです。水が入るかどうか、賭けみたいなものですから。それだけやったら、あとはほとんど発言しないで、寝ていま

した。寝ていたというか、茫然自失ですよ。

○質問者 それは、SR 弁がなかなか開かないとか。

○回答者 開いたんです。開いたんですが、なかなか圧が下がらないところから、SR 弁を開けるところはまだ操作ですから、何やっているんだ、どうなっているんだとなるんですけれども、SR 弁が開いたにもかかわらず、圧が落ちない。そら、見たことかと。結局、サブチェンの方が高いですからね。落ちないんじゃないかと。落ちないで、燃料がどんどん水位が下がっていつているなど。

もう一つは、残り時間がなかったものですから、ポンプが、消防車の燃料がなくなって、水を入れるというタイミングのときに、炉圧が下がったときに水が入らないと。そこでもまたがくっと来て、入れに行けという話をしています、これでも私はだめだと思ったんですよ。私はここが一番死に時というかですね。

○質問者 パラメータを見ると、減圧操作が一旦されたと見られる 0.8 とか、0.7 とかいうところまで、8 月 14 日の夕方に落ち込んできている。0.5 ぐらいまでですね。それからまたしばらくすると、9 時ぐらいですかね、8 時 54 分とか、そのころになるとまた 1 を超えてきたり、また 0.4 ぐらいまで落ちてきたり、今度また 1、2、3 まで上がってきたり、ずっと一定になっていないんですね。結局、また入れなくなってくるんですね、この状況だと。SR 弁で、こういうときは更に減圧をしてとかいうのを繰り返すとなるんですか。

○回答者 このときは、結局、何で圧が上がっているんだ、バルブ開いているのかという確認をして、多分、その操作をさせたと思うんですけども、何せ、ここは私の記憶から全部消したいと思うんです。ここを思い出すと、トラウマみたいなものですから。

○質問者 14 日の、今のお話は夜中のお話になるんですね。

○回答者 19 時ぐらいからですかね。実際はですね。

○質問者 パラメータを見ると、20 時 54 分に 1.170 まで行って、そこから 1.8 とか、1.4 とかまで上がっていつて、また 21 時 20 分に一旦 0.8、0.6、0.5 と下がるんですね。しばらくそれを維持していたんですが、22 時 50 分に 1.8、23 時に 2.07、2.65、3.15 と上がってきて、また 23 時 30 分から下がってきているようですね。一旦また下がるんだけれども、今度ずっと行くと、また 1 を超えてしまう、2 まで行ってしまうというのが、夜中の零時から 1 時にかけてぐらいあってというのがずっと繰り返して、大体このころの時間帯の話になるんですかね。

○回答者 その前の段階で、一回下がったところはいいんですけども、下がったところぐらい、要するに、9 時とか、ここで炉注ができていればいいんですけども、ここで炉注が整わなかったんで、ここで燃料を入れているんですよ。ここで一回、私はがくっと来てしまったわけです。何だ、水入っていないのかと。入っていない、燃料切れしましたと。ばかり言っているんじゃないと言って、[REDACTED]の頭をぶん殴ってという状態でさせたと。

○質問者 ようやく減圧して 1 を切った、21 時とか、21 時 20 分とか、そのころにちよう

どタイミング悪く燃料切れみたいなの、そういうのがあって、またやらなかったら、また上がってくるといことなんですね。

○回答者 そうです。これもどこで燃料入れて、水が入ったか、覚えていないんですけれども、その後、下がっているんで、やはり水が入ったと思うんです。水が入ったら、逆に、今度は、水が加熱した燃料に触れますから、ふわっとフラッシュして、それで圧力がぐっと上がってしまったという現象だと思っているんですけれども、また水が入らなくなる。そういう形で若干落ちてきて、そういう現象だと私は思っているんですけれども、解析をやってみないとわかりません。いずれにしても、かなりこれは損傷して、メルトに近い状態になっていると私は思っていましたから。

○質問者 14日から15日のかけての夜ですね。

○回答者 はい。

○質問者 そのときは、実際、協力企業さんたちは帰られたんですか。

○回答者 まず、廊下にいる人はほとんど帰ったと。

○質問者 当時ですと、本部に詰められている東電の社員の方々いますよね。その人たちはどう。

○回答者 本部といたしますか、サイトですね。免震重要棟。そのときに、■■■■君という総務の人員を呼んで、これも密かに部屋へ呼んで、何人いるか確認しろと。協力企業の方は車で来ていらっしゃるから、(・・・)。うちの人間は何人いるか確認しろ。特に運転・補修に関係ない人間の人数を調べておけと。本部籍の人間はしようがないですけれどもね。使えるバスは何台あるか。たしか2台か3台あると思って、運転手は大丈夫か、燃料入っているか、表に待機させろと。何かあったらすぐに発進して退避できるように準備を整えるというのは、こんなところに出てきていませんが、指示をしています。

○質問者 それは、2号機とか4号機がああいう感じに、15日の6時になりますね。それよりももっと前にそういうふうにして。

○回答者 ずっと前です。2号機はだめだと思ったんです、ここで、はっきり言って。

○質問者 それは3号機とかよりも2号機。

○回答者 3号機は水入れていましたでしょう。1号も水入れていましたでしょう。水入らないんですもの。水入らないということは、ただ溶けていくだけですから、燃料が。燃料が溶けて1,200度になりますと、何も冷やさないと、圧力容器の壁抜きますから、それから、格納容器の壁もそのどろどろで抜きますから、チャイナシンドロームになってしまうわけです。今、ぐずぐずとは言え、格納容器があり、圧力容器、それなりのバウンダリを構成しているわけですが、あれが全くなくなるわけですから、燃料分が全部外へ出てしまう。プルトニウムであれ、何であれ、今のセシウムどころの話ではないわけです。放射性物質が全部出て、まき散らしてしまうわけですから、我々のイメージは東日本壊滅ですよ。

○質問者 それで準備は一応、最低限の人間を残そうということ考えておられて、その

後、すぐに退避というふうになっていないですね。

○回答者 それは、水を入れに行ったわけですよ。水がやっと入ったんですよ。入ったという兆候が出たんで、そこで、水入ったというふうに喜んで、あとはずっと水を入れ続けるだけだということで、忘れてしまいました、はっきり言って、ここは忘れたいんだけど、余りここの時間を取りたくないんですけれども、忘れてしまいましたけれども、やっと助かったと思ったタイミングがあるんです。

○質問者 それで、しばらくは。

○回答者 水を入れ続けるしかないんで、悪いけれども、あとは燃料補給してくれということで、ずっと燃料補給をお願いしてですね。

○質問者 水位は出ていないんですけれども、9月15日の1時10分から20分ぐらいの間以降、0.68とか、その辺り、ずっと、0.65とか、この辺はもう水が入ったというような。

○回答者 入っていると思っています。確実に入っている。

○質問者 それで、皆さん、退避せずに踏みとどまってやっておられた。

○回答者 そうです。

○質問者 そのころに、本店ではなくて、サイト内のある方のメモ書きなどによると、かなり詳細にそのときのことかなと思われることが書かれているんですけれども、当時、死ぬか生きるかみたいな思いをずっとされて、やってきていて、5時ぐらいに菅さんが来られて。

○回答者 本店ですね。

○質問者 本店の方に。本店の本部のところで、テレビ会議室から映るところに来られた。

○質問者 あれはテレビ会議室なのかどうか、私はよくわかりません。本店の状況はよくわからないんですけれども、菅さんが来るということで、菅さんの席を設けて、こちら側に取締役が座るような席がずっと映っていました。本店のビデオというが、テレビ会議の。その状態で、6時を待っていたような感じなんです。5時ではなくて、ちょっと過ぎたころだと思うんですけれども、菅さんがそこにあらわれて、最初、清水社長とか、勿論、勝俣会長以下、常務以上だと思うんですが、部長もいたかわからない、私はそこは見えないんで、本店で聞いていただくのが一番正確だと思うんですけれども、いて、そこで菅さんが、何でこんなにたくさん集まっているんだと。細かい話は忘れちゃったけれども、かなり態度悪く、怒り狂って喚き散らしていたという記憶はあります。

○質問者 全部ではないんでしょうけれども、そのときの書き取った人なりの印象に残った言葉が書かれているところがあるんですけれども、そういうことがあったのかどうかの確認なんですけれども、ここで、私があつと思ったのが、撤退はないとか、命を賭けてくださいとかですね。

○回答者 それは言っていました。

○質問者 そういうことを言っているんですね。その前に、今、話を確認させていただいたら、細野さんなりに、そういう危険な状態で、撤退ということも。

○回答者 撤退というのは、私が最初に言ったのは、全員撤退して身を引くということはありませんよ。私は残りますし、当然、操作する人間は残すけれども、最悪のことを考えて、これからいろんな政策を練ってくださいということを申し上げたのと、関係ない人間は退避させますからということと言っただけです。

○質問者 恐らく、そこから伝言ゲームになると、伝言を最後に受ける菅さんからすると、ニュアンスの伝え方があると思うんですね。

○回答者 そのときに、私は伝言障害も何のあれもないですが、清水社長が撤退させてくれと菅さんに言ったという話も聞いているんです。それは私が本店のだれかに伝えた話を清水に言った話と、私が細野さんに言った話がどうリンクしているのかわかりませんけれども、そういうダブルのラインで話があって。

○質問者 もしかすると、所長のニュアンスがそのまま、所長は、結局、その後の2号機のとときを見てもそうですけれども、円卓のメンバーと、運転操作に必要な人員とか、作業に必要な人員を最小限残して、そのほかは退避という考えでやられているわけですね。

○回答者 そうです。

○質問者 菅さんは、それもまかりならんという考えだったのかもしれませんが、撤退はないとか、命を賭けてくださいとか、遅いとか、不正確とか、間違っているとか、あるいは、これは日本だけではなくて世界の問題で、日本が潰れるかどうかの瀬戸際だから、最大限の努力をしようとか、そんなのが延々と書かれてあるんですよ。ニュアンス的にはそういうニュアンスですか。

○回答者 そんなニュアンスのことを言っていましたね。

○質問者 来られたのは、関係というのは、海江田さんとかは来られたんですか。

○回答者 菅さんと、官房長官が来たのかな、海江田さんはあのときいたのかな、よく覚えていないです。ここは、済みません、どっちかという、私の記憶より本店にいた人間の記憶の方が正しいと思います。

○質問者 本店の人が記憶どおりきちっと勇気を持って言っていたのが一番いいんですけれどもね。

○回答者 言わないですね。

○質問者 もう少し私のことを信用してくれればいいんです。

○回答者 そのメモは、ほとんどそのようなことをおっしゃっていると思っていただいてもいいです。そのタイミングで、うちはうちで、例の2号機のサブチェンがゼロになって、音が聞こえたので退避しますと。さっき言った意味ですね。必要ない人間は退避しますという騒ぎが朝あったときに、ちょうど菅さんが来ているときに、テレビ会議で、その辺でとりあえず(・・・)

○質問者 2号機に異変が生じて、必要人員残して退避というような、その状況のときに、例えば、菅さんなりがテレビ会議を通じて、こっちに状況を聞いてくるとか、そういうことはなかったんですか。

○回答者 このときはそれ以上のことはなくて、細野さん、これは危ないですというか、まだ水が入る前ですね。水が入らなかつたらえらいことになる。炉心が溶けて、チャイナシンδροームになりますということと、そうなった場合は何も手をつけられないですから、1号、3号と同じように水がなくなる、同じようなブランドが8つできることになりますから、凄まじい惨事ですよという話はしていました。

○質問者 それは細野さんに対して、電話でですか。

○回答者 電話しました。

○質問者 そのときは、携帯電話。ピッチか何か。

○回答者 向こうの携帯にこちらから、本店経由。本店経由というのは、うちのPHSは、          という、本店を回してから          を回すと一番かかりやすかった。          を押してから、携帯番号の090というのが、こっちからかけるときに一番かけやすかったんで、それでかけた。

○質問者 こっちで使うのはピッチを使うわけですか。

○回答者 そうです。

○質問者 そうしたら、本店を介して、細野さんにつながって。

○回答者 そこはダイレクトなんです。本店というよりも、回線的に本店の回線につながるだけで、通話はいきなり細野さんの携帯にかかる。

○質問者 電話の相手はいきなり細野さん。

○回答者 細野さんに話した。

○質問者 細野さんは、最悪の事態ですね、それは。それについて何か。

○回答者 ああ、そうですか、所長の言う緊急事態というのはよくわかりました、ただ、まだあきらめないで頑張ってくださいということを言って、その状態だったと思います。

○質問者 細野さんは、そうしてみたときに、電話でのやりとりが多かったんだと思うんですけれども、対応として、例えば、菅さんはああいう。

○回答者 細野さんは比較的というか、常に冷静でしたね。声を荒らげることもなくて、そちらの状況はいかがですかと。こちらの情報をお話ししたときに、こういうことでよろしいですかと、厳しいかもしれないけれども、頑張ってくださいと。

○質問者 そうですか。では、例えば、意思決定などをするに当たってとか、現場でいろいろ実施をしようとするときに、そこで混乱するなどということはないわけですね。

それで、8月15日の8時ぐらいに異変が生じて、最初は2号機の圧力が一気に低下していった、それから、衝撃音がしたということが合わさって、最初の報告のときは2号から報告が来て、2号であったんだろうという、この音と結びついてですね。その後、今度また4号の方という話も来るわけですね。しばらく人員が少なくなる。

○回答者 バスで退避させました。2Fの方に。

○質問者 このときというのは、例えば、さっきの引き続き爆発音というか、何があるかわからないから、しばらくは現場で作業とかはできないですね。ただ、注水の、例えば。